

2021年度

# 愛知の国語教育

(第57集)

## も く じ

I	はじめに	2
II	研究の経過	3
III	研究の内容	5
1	指導事例	5
2	第71次教研のまとめ	
(1)	読み方教育	9
(2)	つづり方(作文)教育	10
(3)	言語・音声表現の教育	11
IV	終わりに	12

愛知教職員組合連合会 教育課程研究委員会国語教育部会

2021年度 教育課程研究委員

◎部長 ○副部長

### ブロック推薦

名古屋			尾 張			三 河		
氏名	単組	学校名	氏名	単組	学校名	氏名	単組	学校名
◎澤野佑輔	名古屋	引山小	関戸亮太	春日井	大手小	○白岩和樹	豊川	御津南部小
○土松真紀	名古屋	味鋤小	仁科真由美	尾北	古知野中	拙衣里子	幸田	北部中

### 第67次～第69次教育研究全国集会レポート提出者

第67次			第68次			第69次		
氏名	単組	学校名	氏名	単組	学校名	氏名	単組	学校名
安藤里予 (代)深谷麻衣	愛知 愛知	市が洞小 (長久手)南中	舘 純子	名古屋	汐路小	森川雄介	春日井	小野小
藤井 桂	岡崎	美合小	後藤佑介	名古屋	大須小	蛭川義之	一宮	大徳小

第71次教育研究全国集会レポート提出者 川嶋大介(名古屋・名東小)

小山和哉(豊田・寿恵野小)

## I はじめに

教育研究愛知県集会在、愛知県産業労働センターにおいて、盛大に行われ、ここに愛知の国語教育第57集をつくることができました。とりわけ、教育研究愛知県集会の正会員になられた先生方の真摯で熱意あふれるとりくみ、そのとりくみを支え、温かく励ましてくださった分会・地域の先生方や父母の方々に感謝いたします。

これまで愛知の教研活動（国語教育）では、目の前の子どもたちを見据えた実践を積み重ね、数多くの教育的財産を築いてきました。その中心となるのは、ことばの教育を通して、認識諸能力をのばしていく、つまり「人間形成を目的としたことばの教育」という考えです。

学習指導要領では、答えのない時代を生き抜く資質・能力を高めるべく、「深く人間的な学び」「創造的・論理的思考力」がとりわけ重視されています。また、よりいっそう系統的に学習内容をとらえ、すべての教科のベースとなり、子どもたちにこれからの時代に必要な「ことばの力」を身につけさせることが肝要となってきます。一方で、子どもの「主体的・対話的な学び」の重要性や、学びの必然性や意義をふまえた授業構想、学習過程もこれまでと変わらず重要です。また、「個別最適な学びと協働的な学びの一体化」が、これからの教育には欠かせません。さらに、一人一台タブレット端末が本格的に導入され、ICT機器を取り入れた授業についても考えていかなければなりません。

しかし、教育現場においては、何とかよい授業ができないものかと、教員が日々悩みながら奮闘している一方で、言語活動が重視されるあまり、本来、活動を通して身につけさせなければならない「ことばの力」がおろそかにされている実態があります。また、教員どうしが、教育の理念や留意事項といった経験値を伝えるための時間や環境が乏しくなっているという現状もあります。

限られた時間の中で、深く、質的に高い学びを行うためにも、国語科の授業で何を行い、どう評価するのかという視点をもつことが大切です。

そこで、そのようなゆたかな学びにむけて、国語科として大切にしたい観点を以下のように考えました。

### ○「基礎・基本」

国語教育では、4つの領域と言語事項のそれぞれの学習において、特に言語活動を重視しながら子どもたちのことばの力を育成していく。「読むこと」の学習では、想像力を育むとともに、ことばが文脈の中でどう使われているのかを考える基礎となるべき語彙力を身につけさせたい。その学びをいかして、「書くこと」「話すこと・聞くこと」などの学習で、自分の考えを発信する基本的な力を身につけさせていきたい。

### ○「生きてはたらく力」

子どもたちがことばの学習を行う際には、学習の中心を担う言語活動の内容が、子どもたちの生活と密接に関係し、学ぶ必要感を感じられることが大切である。それが感じられれば、子どもたちは自然とその学習に魅力を感じ、自分自身で課題を見つけ、身につけたことばの力を活用して課題を解決していこうとする。そのためにも、教材と実社会や実生活との関わりに重点を置きながら、学習を進めていきたい。

今こそ、新しい教育の時流をふまえつつも、不易と伝統にかかわる「守るべき部分」も新たな視点から検証し、教育課程を自主編成してきた過去の教研活動の実践に学ぶべき時なのではないかと思えます。

この愛知の国語教育第57集が、少しでもその役割を担っていれば幸いです。

## Ⅱ 研究の経過

### 1 読み方教育

#### (1) 文学的文章の読み方教育

ア 人間性と人間の生き方を探究する。	(人間の本質)
イ 現実に対処し、変革していく力をつける。	(社会の本質)
ウ 思考力、認識力を育てる。	(認識諸能力)
エ 豊かでみずみずしい感性を育てる。	(豊かな感性)
オ 日本語についての知識を豊かなものにする。	(言語的側面)
カ 文学を正しく鑑賞する力を育てる。	(鑑賞する力)

読み方教育がめざすものとして、上記の六つの目標が確認されてきた。そして、これらの目標を達成するための教材選択の視点として、次の3点があげられている。

#### よい教材とは

- ・ 作品の構造が緻密で、筋の展開に必然性がある。 (形象性)
- ・ 人間がいきいきと描き出されている。 (思想性)
- ・ 感動の質が高いものである。 (教育性)

この視点を具体的な文章で問い直し、自ら選んだ教材を見る目を育てていくことが大切であることが確認されている。また、選定した作品において、教材としての価値を具体的な表現にもとづいた言語面から明確にしていくことが求められている。

文学作品を「読む」ことを、作品の中に書かれていることば一つ一つを大切に、語句の意味、場面での使われ方、文と文とのかかわりなどから読み取れるイメージをふくらませ、「確かに」そして「イメージ豊かに」読んでいくことだと考える。イメージをことばにし、他者と意見の交流をしていくことによって、児童・生徒の頭の中に世界が明確に浮かび上がり、同時に作品のおもしろさ、豊かさが広がっていくはずである。

#### (2) 説明的文章の読み方教育

説明的文章では、「ことばと結びつけて認識諸能力を育てる」ことをねらいとしている。自然・社会・人間を含む現実についての認識を得させたり、現実のあるべき姿や現実の中の人間としての生き方を考えさせたりする過程で、ことばと結びついた認識諸能力(感覚・思考力・想像力など)をのばしていく。

そこで、このねらいを達成するための視点として、次のことが確認されている。

#### よい教材とは

- ・ 正しい認識の上に立ち、わたくしたちの生命を尊重する立場で書かれている。
- ・ 厳密なことば遣いで、論拠となるべき事実が十分に提出されている。
- ・ 段落構成が適切で、論理展開に無理や矛盾がない。
- ・ 児童・生徒を取り巻く状況や発達段階をふまえている。

説明的文章の中のことばや表現には、それに対応する事実や認識のあり方が存在する。そうしたしくみを読み取ることを通して、認識諸能力をさまざまに働かせ、表現されていることを具体化して考えることが大切である。また、教材を読む過程を通して、書き手の論を自分の考えと比較したり、自分の知識や経験に照らし合わせたりすることも大切である。さらに、内容の読み取りだけにとどまるのではなく、説明的文章を情報理解や構成、発信のモデルとして読み取らせていくことも求められている。特に、指導においては論理的な情報理解や発信のために、主張と根拠、意見と具体例、論理的な段落構成、表現上の工夫などの焦点化が望まれる。その上で、個性的で豊かな情報発信に向けての位置づけと評価を考え合わせていく。

## 2 つづり方（作文）教育・音声表現の教育・言語の教育

### (1) 何のために何を

愛知の教研では、これまでに「人間形成にかかわる側面と言語の技術的側面は、一体化してのばしうる」ことが確認され、認識と表現の統一をめざしてきた。知識ばかりをつめこんだ人間ではなく、心の発達の間でも調和のとれた人間を育てることが大切である。そのために、身の回りの自然や社会、人とのかかわりをいろいろな視点から見つめてものの見方を深め（認識する）、ありのままに書いたり話したりする力（表現する力）を高めていかなければならない。また、ありのままに書いたり話したりする力（表現する力）が高まれば、子どもたちは身の回りの自然や社会、人とのかかわりをいろいろな視点から深く見つけ、ものの見方、考え方、感じ方を深めていく（認識する）。

### (2) 何をどのように

#### ① 作文教育

作文は「事実を書く」ことが大切であると考え。昨今、人間関係の希薄さが叫ばれているが、今後子どもたちはより高度な情報化社会を生きていくことになる。事実とは、そのような子どもたちが日々直面する事実のことであり、「事実を書く」とは、子どもたちが身の回りの自然や社会、人とのかかわりをありのままにとらえ、自分とのかかわりをありのままに書くことである。また、「値打ちある作文」とは、書くことによってものの見方、考え方、感じ方が深まる作文である。そのための題材としては、「学校生活の中で友だちと深くかかわったこと」「地域に根ざした身近なこと」など、生活の中から心を揺さぶる題材を探すが、子どもたちの成長につながるといえる。

《選材・取材》	子どもが本当に書きたいことが価値ある題材になる。文の中に書き手の姿が表れるようなものにする。
《構想》	自分の書きたいことを整理し、構築するだけでなく思いを膨らませる。
《推考》	表現したいことが作文に表現されているかを読む。
《鑑賞》	互いの考え方の違いを知り、理解し合うことが認め合うことにつながる。

#### ② 音声表現の教育

音声表現は、文字言語にはない特性（即時性・断片性・流動性・集団思考性）をいかして「認識と表現の統一」をめざす。そのためには、話したり聞いたりすることによってものの見方、考え方、感じ方が深まるような実践を行わなければならない。話し合い活動を通して、自分の思いを場や状況に応じてきちんと伝えられる力、相手の言いたいことをくみ取って聞く力を培うことが重要である。それが、互いを認め合い、思いやる子どもを育てることにつながる。話し合いの内容を深めるためには、話さずにはいられない状況をつくる必要がある。また、思いや考えを引き出すには、楽しい活動をめざして、流動性（相手の反応に応じて表現することができること）を重視するべきである。評価は、それを子どもの成長にどう還元するかを大切に、「何のための評価か」を明らかにしなければならない。

#### ③ 言語の教育

文字・文法・語彙・発音などの言語教育では、「日本語についての科学的・体系的な知識を身につける」ことをめざしている。ことばの構造や体系を知識として一方的に教えるのではなく、発見の喜びや過程を大切にすることが重要である。

入門期のかな文字指導では、文字の学習順序を発音のやさしいものから難しいものへと配列するなど、発音教育と一体化してすすめられるべきである。

文法・語彙・発音の指導においても、日本語の性質や体系を生かした指導法の工夫をすべきである。

### Ⅲ 研究の内容

#### 1 指導事例

研究主題 未来を切り拓く力を育む国語科の指導と評価

～国語科におけるタブレット端末を利用した授業実践～

##### (1) 研究のねらい

社会の在り方が劇的に変わる「Society5.0時代」の到来や、新型コロナウイルスの感染拡大など先行き不透明な「予測困難な時代」に伴い、多様な人々と協働し、持続可能な社会の創り手となる資質・能力を育成することが必要である。令和3年1月の中央教育審議会答申においても、「児童生徒一人ひとりの資質・能力を伸ばすという観点から、新たなICT環境や先端技術を最大限活用することなどにより基礎的・基本的な知識・技能や言語能力情報活用能力、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力の確実な育成が行われるとともに多様な児童生徒一人ひとりの興味・関心等に応じその意欲を高めやりたいことを深められる学びが提供されている。」と指摘がされている。

そのような背景を受けて、実現すべき「令和の日本型学校教育」の姿として、「個別最適な学びと協働的な学びの一体化」が必要とされている。

そこで、ICTを活用しながら、他者と協働し、一人ひとりのよい点や可能性をいかし、よりよい学びを生み出すことで、互いを認め合い、よいところを見つけようとする力を育成したいと考え、実践を行うことにした。

##### (2) 研究の方法

ア 単元 中学1年「話の構成を工夫しよう～好きなことをスピーチで紹介する～」

(光村図書1年)

イ ねらい

(ア) 音声の働きやしくみについて、理解を深めることができる。(知識・技能)

(イ) 目的や場面に応じて、日常生活の中から話題を決め、集めた材料を整理し、伝え合う内容を検討することができる。(思考・判断・表現)

(ウ) 自分の考えや根拠が明確になるように、話の中心的な部分と付加的な部分、事実と意見との関係などに注意して、話の構成を考えることができる。

(思考・判断・表現)

(エ) 言葉がもつ価値に気づくとともに、すすんで読書をし、我が国の言語文化を大切に、思いや考えを伝え合おうとする。(主体的に学習に取り組む態度)

ウ 手だて

##### ① 認め合う授業展開の工夫

(ア) ペアでのスピーチ練習を互いにタブレットで動画撮影し合い、その練習動画を見ながら、アドバイスをし合う。

(イ) スピーチ発表後、発表がよかった生徒を選び、よかった点をワークシートに書く。協働学習ソフトで、選んだ生徒に投票を行う。選んだ生徒のよかった点を班で報告し合う。また、協働学習ソフトで、ワークシートに書いたよかった点を写真撮影して、選んだ生徒に送る。

##### ② 自分の学びを捉え、振り返る活動の工夫

(ア) タブレットで自分のスピーチ練習を動画撮影し、改善点を見つける。

(イ) タブレットで撮影した自分の発表動画を見ながら、学習の振り返りを行う。

### (3) 実践の様子

第1時では、生徒は「自分の好きなこと」をできるだけたくさん挙げ、友達に紹介したい話題を一つ選んだ。第2時では、聞き手にとってわかりやすい話の構成を考え、1分程度に収まるように材料を取捨選択した。

第3時では、「話の内容・構成」「声の大きさ・速さ・間の取り方」という観点をもとに、ペアでスピーチ練習を行った(写真1)。スピーチ練習を動画で撮影する際には、相手のタブレットを使い、自分のタブレットに自分の動画が保存されるように指示をした。動画を撮られながら練習をすることに緊張している生徒も見られた。そんなときに「もっと前を向いて話すといいよ。」「声が小さかったから、もう1回撮ろうか。」などの声が聞かれた。また、時間が1分よりかなり前に終わってしまう生徒は、「今の自分のスピーチって早口だった。」とペアの生徒に聞き、すぐにアドバイスを求める姿が見られた。ペアの生徒どうしで互いに練習動画を撮り終わると、上に挙げた「話の内容・構成」「声の大きさ・速さ・間の取り方」という2つの観点に沿って、動画で確認しながら相手へアドバイスしたいことをワークシートに記入した。その後、動画を見ながら、記入した内容を相手に伝えた。ペアからのアドバイスをワークシートに記入後は、自分のスピーチを自撮りしながら練習するように伝えた。ペアの相手から助言されたア



【写真1 ペアでのスピーチ練習の様子】



【写真2 各自で練習動画を撮る様子】

ドバイスをもとに、自分に最適な方法を考え、練習をする様子がそれぞれの生徒に見られた。早口にならないように、時間を計り、速さや声の大きさを気にしながら練習をする姿、内容がもっと分かりやすく伝わるように内容を推敲した上で練習をする姿、相手に伝わるように身振りを加えて練習をする姿、タブレットを見ながら、顔を上げて読むことができて確認しながら練習をする姿などが見られた(写真2)。授業の最後に、協働学習ソフトに送らせた振り返りシートには「動画を見返すことで、自分の課題がよく分かった。友達からの感想で、自分が気づかなかった所を改善できてよかった。」という意見があった。

第4時では、本番のスピーチ発表会を行った。まず、協働学習ソフトを使って、教員のもとにスピーチの題名を送らせた。送らせた題名は前面黒板のプロジェクターに映し、その前に立ち、出席番号順で発表を行わせた。発表前には聞く人の心構えとして、「人の好きなことは否定しないこと」「大きな拍手をすること」を伝え、肯定的な気持ちで人の発表を聞くことを伝えた。発表の様子は各自のタブレットで教員が撮影をした。本番で撮影した動画は、協働学習ソフトを使って、授業後に教員のもとに送らせた。動画を見ながら練習を重ねたことで、声の大きさや速さが適切な生徒が多かった。また、原稿ばかりを見るのではなく、前を見て、聞く生徒に語りかけるように発表することができた生徒も多かった。中には、印象に残るように、身振り手振りを使ってスピーチを行うことができた生徒もいた。評価シートに記入しながら真剣に発表を聞く姿が見られ、同じクラスの仲間の好きなことの意外性に驚い

ている様子も見られた。授業の最後に、協働学習ソフトに送らせた振り返りシートには「好きなことが伝わるように、聞き取りやすい速さで話すように工夫しました。また、アイコンタクトをこまめにとることも大切にしました。こうすることで、自然と声が大きくなって、より聞こえやすくなると思ったからです。」という意見があった（資料1）。

第5時では、スピーチ発表を聞いて、特によかった生徒を2名選び、ワークシートによかった点を書いた。協働学習ソフトで、選んだ生徒に投票を行った。投票後、画面を共有して、全体場で選ばれた生徒の動画を見た。その後、班の中で自分が選んだ生徒のよかった点などを報告し合った。さらに協働学習ソフトで、ワークシートに書いたよかった点を写真撮影して、投票した生徒に送った（資料2）。生徒の意見には、「聞き取りやすい速さで話していた。」や「どうしておすすめなのかを丁寧に説明していた。」などがあり、発表時の声の聞き取りやすさなどだけではなく、内容にも触れた意見が多かった。よかった点を書いたワークシートの画像がカードとして他の生徒から送られてくるので、選ばれた生徒からは「自分の発表を聞いて、こんな風に思っていることが分かってすごく嬉しかった。」や「みんなの意見がすぐに分かるので、とてもよかった。」などの意見が出た。他の生徒のよかった点を共有した上で、自己評価をワークシートに書いた。ワークシートには、「最初はずっと紙を見ていたし、つまっていました。

しかし、撮影をして見ることで前を向くことができているか確認することができました。」や「他の人の発表を聞いて、自分は説明する部

【資料2 よかった点を書いた生徒の意見】

読書の おもしろさ	私の 好きな 食べ物	スピーチの 題名
<ul style="list-style-type: none"> <li>どうしておすすめなのかわかるように説明していた。</li> <li>聞き取りやすい速さで話していた。</li> <li>私も好きなので共感できた。</li> <li>おすすめの本当の理由を知りたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>先に食べたものがすぐに入れたらいいなと思った。</li> <li>速さも大きさなども良く分かった。</li> <li>私はあまり好きではないので食べやすいものを教えてほしい。</li> <li>おすすめのメニューも教えてほしい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>よいと思ったこと</li> <li>もっとくわしく知りたいと思ったこと</li> </ul>

分が少し長かったように思いました。説明の部分を短くして、もっと興味をひく部分を増やせたらよかったです。」という意見が出た。どの生徒も、「自分はどこができたのか」「どこが足りなかったのか」を客観的に見て自己評価を書くことができていたと考える。最後には単元全体を振り返りシートにまとめた。振り返りシートには、「文章の構成によって、伝わりやすくなったり伝わりづらくなったりすることが分かりました。今回私は結論から話す構成にしましたが、構成を逆にするとクイズのように期待感が高まる構成になると分かりました。」という意見や、「自分の好きなものは何か改めて考えることができた。他の人の好きなものを知れて、よりなかよくなれると思った。発表をするときは、はきはきと大きな声で、興味をもってもらえるような内容にしようと思った」という意見が出た。今回の授業を通して、今後の発表の際にも役立たいことを熱心に書く生徒の姿が多く見られた。振り返りシートには毎時間の授業ごとに課題を書き、振り返りを書く欄を作っている。また、単元の最後には「単元の学習を終えて」という欄を作り、「この単元で学んだこと」や「日常生活

【資料1 振り返りシート】

課題に対し 考えたこと	7月19日(月)	課題
<ul style="list-style-type: none"> <li>結論から事例や理由を提示するようにして、疑問を引き出すようにしました。</li> <li>アイコントラクトをこまめにとることも大切にして、話しやすいように工夫しました。</li> <li>大きさが大きくなると聞き取りやすくなるので、速さを注意して話し、速さは聞き取りやすくなるように工夫しよう。</li> </ul>		好きなことを伝わるように工夫しよう。

りシートには毎時間の授業ごとに課題を書き、振り返りを書く欄を作っている。また、単元の最後には「単元の学習を終えて」という欄を作り、「この単元で学んだこと」や「日常生活

や他教科でいかせそうなこと、これからも考え続けていきたいこと」を記入させている（資料3）。自分の振り返りをポートフォリオ形式で積み重ねることで、学びに向かう力や自分の学習の調整に役に立つと考える。

#### (4) 成果と課題

今回の単元では、ICTを活用しながら、他者と協働し、一人ひとりのよい点や可能性をいかし、よりよい学びを生み出すことで、互いを認め合い、よいところを見つけようとする力を育成したいと考え、実践を行った。

一人1台のタブレットは、生徒一人ひとりに応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を生んだと考える。今回の実践では、「自分の練習には今、何が必要か」を考え、タブレットを活用する生徒の姿が見られた。時計機能を使って、時間を計って練習する生徒や自分の動画を何回も見直して改善点を模索する生徒の姿は、学習が最適となるように生徒自身が学びを調整する姿、学びに対して主体的な姿であると考えた（写真3）。

また、ICTの活用は、一人ひとりのよい点を客観的に見る上でも役に立った。今までであれば、撮った動画を見るのにも全員で共有して見たり、時間がかかったりしていた。しかし、タブレットによって、すぐに動画を撮影したり、他の生徒の動画を必要であれば見返したりすることができた。また、協働学習ソフトによって、他の生徒の感想や意見をすぐに共有することができた。その場で必要なものをすぐに見ることができるので、自分の学習の改善をすぐに行う姿が見られた。よりよい学びを生み出すことができたと考える。

ICT活用における課題は二つあると考える。課題の一つ目は、ICTでできることをさらに広げていくことである。今は授業の振り返りを紙に書かせている。しかし、今後はタブレットを使い、デジタルポートフォリオとして記録していこうと考えている。文章作成ソフトを使い、作文や原稿を書く時に、推敲をする手助けとしていきたい。国語科として「手で文字を書く」「タブレットで言葉を打つ」のどちらの技能も大切にして、自分の意見をしっかりと表現できる生徒を育成したい。また、私の学校で行った「ICT端末を授業で活用できていますか。」というアンケート結果では、「できている」「だいたいできている」という教員の回答が24.3%であった。ICTでできることを広げるためには、学校全体で活用方法を模索して、共有していくことが重要であると考えます。

二つ目は、情報リテラシーをすすめていくことである。タブレットを使えば、簡単に自分の意見が送れ、気軽に心ない言葉を送ってしまうことがある。それをふまえ、使用する側の技能だけではなく、互いを認め合おうとする気持ちの面も育成していかなければいけないと考える。また、使用させる側も、タブレットで起こりうる問題点を想定し、使用方法の改善を模索していかなければならない。

今後もICTを活用しながら、他者と協働し、一人ひとりのよい点や可能性をいかし、互いを認め合い、よいところを見つけようとする力を育成する実践を行っていきたい。

【資料3 ポートフォリオ形式の振り返りシート】



【写真3 最適な学びを考える様子】

## 2 第71次教研のまとめ

### (1) 読み方教育

#### ① リポートの概要

目の前の子どもたちの実態を見つめた価値ある実践が多くみられた。報告されたリポートをもとに、どのように読む力をつけるべきかについて討論が展開された。

#### ② 第71次教育研究愛知県集會に提出されたリポートの傾向

##### ア 説明的文章の読み方教育

〈何のために・何で〉

具体物や体験活動をもとに、文章を正確に理解し、適切な言葉を使える児童を育成する実践が報告された。また、言葉による多様な見方・考え方を働かせ、国語で培った資質・能力を日常生活でも汎用的に活用できるように「相手に分かりやすく伝える」文章構成や表現技法を学び、それを他教科において活用する実践が報告された。

討論では、説明的文章の授業で身につけさせたい力や、教材の価値や特性を明確にして指導にあたることの重要性が話し合われた。

〈何を・どのように〉

文章を要約したり、対話的に学び合ったりする中で、書き手の伝えたい事柄を理解する実践が報告された。また、相手を意識し、集めた情報をわかりやすく書いて伝える実践が報告された。

討論では、読むことと書くことをどのように関連づけるのかについて意見が出され、相手意識を身につけさせるにはどのようにすればよいのかについて話し合われた。

助言者からは、分かりやすい文章とは「論理的」「創造的」「批評的」である文章であり、意見文に題名を付ける大切さ、出典や具体例と考察を分けて書くことが重要であるとの助言を得た。

##### イ 文学的文章の読み方教育

〈何のために・何で〉

自主教材を用いて本文の言葉を根拠に意見交流をする中で、主題を読み取らせ、自分の生き方に向かわせる実践が報告された。また、仲間と作品の主題を読み取り、作品論を書くことを通して、人間や社会についての考えをもたせる実践が報告された。

討論では、物語教材を扱うことの意義や、自主教材をどのような視点から開発し、活用すべきかについて話し合われた。

〈何を・どのように〉

読むための技能を習得させ、それを演習の場で活用させることで主体的な読みを目指す実践が報告された。また、本文を根拠にして登場人物を掘り下げて読むことで、生徒に深い読みを促す実践が報告された。

討論では、主体性をいかに引き出すか、イメージ豊かに読みを広げるための工夫、読みを深めるための言語活動、「深い読み」とは何かなどについて話し合われた。

助言者からは、深い学びとは「世界と自分との再発見」であり、教科の深さや本質への感銘、創造的な課題発見・解決能力、そして、将来の自分の生き方にかかわることであるとの助言を得た。また、教材や子どもの実態を読み解き、具体的な教材論をもって子どもたちに身につけさせたい資質・能力は何かを常に考えたり、国語教育において説明文や物語文を扱い、何を学ばせるかという本質的で根本的な学ぶことの意義について追究したりするなどして指導者が向き合うことの重要性が示唆された。

#### ③ 今後に残された課題

- ねらいや評価を明確にしたとりくみと、それに沿った教材の発掘と活用
- 読む力を身につけるための言語活動のあり方
- めざす学力を身につけるための段階的かつ系統的な指導

## (2) つづり方(作文)・言語・音声表現の教育

### ① リポートの概要

つづり方(作文)の教育9本と、言語の教育3本、音声表現の教育10本のリポートが報告された。目の前の子どもたちの実態を見つめて、どのような子どもを育てるのか、文字言語・音声言語のよさをいかして、どのような力を育てていくのかについて討論が展開された。

### ② 第71次教育研究愛知県集會に提出されたリポートの傾向

#### ア つづり方(作文)の教育

〈何のために・何を〉

「作文・つづり方を通して、どのような子どもを育てていくか。文字言語ならではのよさとは何か」を柱として討論が展開された。自分の思いを表現するために、構想メモを用いて自分の考えをまとめ、仲間と考えを共有する活動を取り入れた実践や、振り返りシートを用いて、自分に足りない文章技術を意識させたり、資料提示の仕方を工夫して、学習意欲を高めたりする実践が報告された。

〈何を・どのように〉

選材・取材については、「認識力・表現力を育てるために、どのような題材を取り上げ、どのように見つめさせるか」ということについて話し合われた。地元のよいところを見つけ、リーフレットで地域の人に紹介することで書く意欲を高める実践が報告された。討論では、子どもの興味・関心をベースに題材を選ぶこと、そして特別な出来事に限らず、日常生活の中から題材を探すことは自己の気持ちや表現に意識を向けさせ、認識力を高めるために有効であることが確認された。

構想・記述・推考・評価については、「認識力・表現力を育てるために、どのような手だてや支援が必要なのか。また、ありのまま書いているのかを明らかにするために、どのような観点や方法によって推考すればよいのか」ということについて話し合われた。身近なものについて考え、発表する相手を明確にすることで、相手意識をもって書く活動に取り組みさせた実践が報告された。討論では、文字言語のよさとして、いつでも読み返すことができ、自分の考えを見つめ直すことができること、自分と向き合うことができ、自分の本当の思いに気づくことができることなどが確認された。

助言者からは、「表現と認識の統一」をめざすことが大切であり、子どもたちのどんな言葉の学びが育つのかを考えて授業構想を立てることが大切であるとの助言を得た。

#### イ 言語の教育

子ども自らが言語の法則性に気づき、日本語についての科学的・体系的な知識を身につけていくためには、どのような手だてや支援が必要なのかについて話し合われた。

書写の授業において、身につけたい能力や基礎・基本を的確にとらえた指導をすることで書字活動の基礎・基本が身につく、日常生活にいきる書字活動につながる実践が報告された。また、ICTを活用することで児童生徒の興味関心を高め、学習内容の理解を促す実践が報告された。これらの報告後、学習したことを日常生活にいかす手だてについて話し合い、めざす姿を視覚的にとらえ自ら書きたいという意欲を引き出すことの重要性が確認された。

## ウ 音声言語の教育

〈何のために・何を〉

身につけた言葉の力をいかすために「ことばの力マップ」を用いて、話す事柄の順序を考え、課題の絵について「一人調べ」「チーム調べ」「全員調べ」と段階的に話し合い、分かりやすい説明で課題の絵を伝える実践が報告された。

討論では、子どもたちの思いに寄り添って実態をとらえる大切さや、チームや学級全員で一つの文章を作り上げることが難しいことから、皆が参加できるようにホワイトボードを活用するなど、課題に対する話し合いの最適人数を考える必要性が話し合われた。

〈何を・どのように〉

速音読や、アイスブレイクに取り組み、思考ツールを活用した実践や、話し方と聞き方モデルを活用した実践が報告された。

「話す・聞く」の評価方法としては、タブレットの動画機能を使用して、対話の内容や声の大きさや姿勢を確認したり、評価シートで客観的に評価したりする方法が報告された。

討論では、話し合いにおいては聞き手の役割が重要性であり、傾聴姿勢を示したり、聞く観点を提示したりする、聞き手を育てる手だてについて話し合われた。また、話す観点だけでなく、聞く観点を示すことの有効性が話し合われた。

音声言語の評価については、タブレットなどの ICT 機器に記録し、自分自身でめあてを達成しているか振り返ることの有効性について話し合われた。

助言者からは、音声言語の教育では、文字言語を読むことを音声言語の実践とせず、音声言語の特徴をいかした実践に取り組めるとよいとの助言を得た。

音声言語の評価については、評価が難しいため、ICT機器を用いたり、第三者を置いたりする方法が有効であるとの助言を得た。

### ③ 今後に残された課題

「話す・聞く」の活動でめざすものは、ものの見方や考え方を深める話し合いがなされることである。考えを深めること、つまり「なぜか」という問いをもつことのできる手だてが重要視される。また、音声表現は、身体的表現であること、対話性があること、コミュニケーション能力につながること、推考性があることにおいて価値ある活動であると言えるが、ものの見方や考え方を深めることにはつながりにくいと言える。これからも、音声表現がもつ即時性・流動性・断片性の問題点を克服する実践に取り組んでいかなければならない。

今後も「表現と認識の統一」をめざして、子どもの実態をふまえ、表現の指導によってどのような子どもを育てていきたいのかを明らかにすることが重要である。文字言語、音声表現それぞれの特長をいかし、目標と評価方法を明確にしていかなければならない。

## IV 終わりに

今回行われた第71次教育研究愛知県集会（国語教育）では、提案レポートを中心とした熱心な討論が行われた。一つ一つの実践が、先生方の熱意あふれるものであり、今後の愛知の国語教育をさらに推進していくものだと感じられた。

さて、本年度の実践も、子どもたちの力をのばしたい、よりよい授業にしたいとの思いをもって積み上げられた実践ばかりであった。教員は、目の前の子どもたちが、授業でつけた力によって、どのような人生を送っていけるのかを思い描く。そのために、子どもたちの課題を把握し、どのような教材で、どのように指導するのかを追究する。それが、教研の実践のあり方である。そこに教科書があるから授業をするのではなく、そこに子どもたちがいるから授業を行う。目の前の子どもたちの姿を見つめ、どのように国語の力をつけさせ、それによってどのような子どもに育てていきたいのか。そのような願いがあつてこそ、授業は確立していくものだと考える。

本年度、「文学・その他」「作文・その他」どちらにおいても、認識力を育てるための指導のあり方、そして、国語教育で身につけさせたい資質・能力、という点が討論の中心となっていた。それぞれの実践が、相互に補完し合うことで、国語教育の一つの目標である「認識と表現の統一」が、より円滑に行われていくと考える。

わたくしたちこそが、子どもを目の前にしている教育者なのだという思いを強くもちながら理論と実践を深め、豊かな教育をさらにすすめていきたい。今後も教研の実践が、愛知の国語教育の発展に寄与することを願う。